

天声人語

作家の石牟礼道子さんは本ら
しい本を読まずに育った。20歳
になるまで読書経験といえば、
中里介山の長編時代小説『大菩薩峠』くらい。都会から届く文
学誌にも反発を覚えた▼めざし
たのは、故郷熊本の天草や水俣のお年寄
りが使う言葉をいかした作品。歌うよう
な抑揚をつけて人々が話す方言で、不知
火海の豊かさをうたい上げ、それを破壊
した水銀汚染を告発した▼「祈るべき天
とおもえど天の病む」。水俣病患者と一緒に運動したころに詠んだ句だ。祈って
も天は何も言ってくれない。天自身が病
んでいるのか。石牟礼さんの憤りを伝え
る▼患者から学んだ哲学は「のさり」だ
という。天からたまわったものを意味す
る。豊漁が「のさり」なら、病苦もまた
「のさり」。「迫害や差別をされても恨
み返すな。のさりち思えぞ（たまものだ
と思え）」。加害企業も酷薄な世間も恨
むまい。その崇高さに打たれる▼訃報に
接して、十数年前の取材ノートを読み返
してみる。「患者さんは病状が悪いのは
魚の供養が足りないからと考える。岩や
洞窟を拝んだりする」「それを都会から
来た知識人は無知で頑迷だと言う。私は
そうは思わない。患者さんは知識を超
えた野性の英知を身につけています」▼代
表作『苦海淨土』の題に込めた思いを自
ら語る。「患者さんの家に通い、絶望の
極限を見た。地獄から抜け出すには淨土
へ行くしかない。希望の見えない日々
でした」。水俣の人々の言霊を心でと
らえ、世に問い続けた人生であった。

2018・2・11